

編集後記

9年ぶりにカトマンドゥーを訪れた。ドイツ政府は30年来、この地にNepal Research Centerという研究所を保持し、ネパール国立文書館と共同して写本収集とマイクロフィルム化事業を行っている。研究所には教授資格（Habilitation）を準備中の研究者が一人、所長として常駐し、ネパール内の写本調査と収集に従事するかたわら、国立文書館の技官を指導してマイクロフィルム作りを行っているのである。

Nepal-German Manuscript Preservation Projectと称せられるこのプロジェクトは、実によくできていると、かねがね思っていた。基礎的素養を備えた若手研究者は、多様な写本に直接触れて視野を広げつつ研究に専念できる。それがまた写本の収集と保存という古典文献学の基盤確保となっている。このような施設を作り、維持しているところにドイツ古典学の堅牢さを見る思いがする。実際、ここで数年の研究生活を過ごし、今はインド学、チベット学の泰斗となった人も少なくない。過日の公開シンポジウムに来講下さったHarvard大のMichael Witzel教授もその一人である。

研究所を訪れると、現在の所長、Klaus-Dieter Mathes博士は、研究所内外の種々の状況を説明した後に国立文書館に案内し、館長Sanu Nani Kansakar女史を紹介下さった。女史には、Mathes氏とともに自ら館内を案内いただいた。

最近ドイツ政府が寄贈した2階建のマイクロフィルム館では、30年来嘗々と撮影された16万のサンスクリット、チベット写本の、500万コマを越すマイクロフィルムが空調設備の整った部屋に保管されていた。ところがかんじんの写本保管庫では、以前のとおり9～14世紀頃の写本が空調のない部屋の棚に無造作に山積みされていた。係員の写本の扱いも荒く、夏の雨季には高温多湿のこの地で、劣化は速かろうと思った。

実は日本を発つ直前、来日された上記プロジェクトの責任者Albrecht Wezler教授（Hamburg大）とお会いしたおり、教授はこの写本の窮状を語り、「古典学再構築」計画の中に、保存処置への協力を入れてもらえまいかと要請された。検討しますと返答してやって来たのだったが、教授の懸念ももっともと思った。Kansakar女史は日本からのいかなる種類の助成も歓迎すると話された。「古典学再構築」に直接入れるには大きすぎるが、何か方策を検討したい。

平成11年2月28日

中谷 英明